

池明観教授略年譜（一九二四年一〇月）

一九九四年一〇月現在

田代安見子

以下は、一九九三年三月に退官された池明観先生の略年譜である。

・文中における人名の敬称は省略した。

・年齢は満年齢で記載した。

・著作は日本で発表された単行本のみとした。

・『』は単行本を示し、「」は講義名・連載名を示す。

年月日	年齢	経歴	韓国情勢
一九二四 一〇・一一	七	平安北道定州で生まれる。	二五 朝鮮共産党創設
三一・四	一三	定州普通学校に入学する。	二六 六・一〇独立万歳運動
三七・四	一四	定州普通学校を卒業する。	二七 新幹会成立
三八・四	一五	平壤高等学普通学校に入学する。	二九 元山ゼネスト
四二・三	一九	平壤高等普通学校の学校名が変わり、平壤第二中学校になる。	三九 光州学生抗日運動 創氏改名 強制連行開始
四四・四	二〇	平壤第二中学校を卒業する。	四五 徴兵制実施
四五・三	二一	新義州師範学校 講習科に入学する。	四五 第二次大戦終わる
四七・六	二三	新義州師範学校 講習科を修了する。	四八 大韓民国成立
四八・九	二四	母校の定州朝日国民学校で、日本人の女教師二人と共に教員となる。 忠清北道忠州師範学校付属国民学校教師となる。 ソウル大学校文理科大学宗教学科に入学する。	朝鮮民主主義人民共和国 成立

年月日	年齢	経歴	韓国情勢
五〇・九・七	二六	朝鮮戦争で韓国陸軍第三警備大隊に入隊する。	五〇 朝鮮戦争勃発（五三）
五一・六・一五	二七	陸軍通訳將校に任官される。	五二 日韓会談始まる。
五四・九	三〇	ソウル大学文理科大学宗教学科を卒業する。	
五四・一一	三一	姜貞淑と結婚する。	
五五・四	三二	陸軍を除隊する。	
五六・四	三三	ソウル大学大学院宗教学科修士課程に入学する。	
五八・三	三四	宗教学を専攻する。徳成女子高等学校教師となる。	
六〇・四・一九	三六	ソウル大学大学院宗教学科修士課程を修了し、同博士課程に進む。	六〇・四・一九 人民蜂起
六〇・四・一九	三六	新聞雑誌など直接世論に訴えるジャーナリズムに投稿を始める。	
六一・一二	三七	徳成女子中・高等学校の教頭になる。	
六一・一二	三七	徳成女子大学で助教授になり、哲学を教える。	六一 朴正熙軍事クーデター
六二・三	三八	徳成女子中・高等学校の校長になる。	
六四・七	四〇	ソウル大学大学院博士課程を単位取得満期により、退学する。	六四 日韓会談反対闘争激化
六四・八	四〇	「朝鮮日報」に書いた記事が当局の忌避に触れ、徳成女子大学、徳成女子中・高等学校、ソウル大学文理科大学講師を辞職する。	
		当時、ソウルで反政府的な活動をしていた主力雑誌である月刊誌「思想界」の主幹に就任する。	
		ジャーナリズムに影響を与えながら、日韓条約の反対運動において、精力的に活動を展開する。	
六五・一二	四二	新教出版の秋山憲兄社長（現会長）・高戸要とソウルで会う。	六五 日韓条約調印
		日本の月刊雑誌「自由」社の招待により、初めて渡日する。	
		京都の龍安寺の石庭に魅せられる。この時の旅行記を一部「自由」で翻訳連載する。	
		北森嘉蔵、秋山憲兄に韓国教会史の執筆を薦められる。信濃町教会で新教出版の森岡巖編集長（現社長）の紹介で小川圭治と知り合う。	
六六・三		当局の弾圧により経営危機に陥り、「思想界」の主幹を辞職する。	
		徳成女子大学で教授として、哲学を教える。	
六七・九	四三	『流れに抗して』（新教出版社）を刊行する。	
		米国ニューヨーク・ユニオン神学校に留学する。	

年 月 日	年 齡	経 歴	韓 国 情 勢
六七・ 六八・ 一九〇九	四三 四四	米国ニューヨーク・ユニオン神学校に留学する。 米国を離れ、ヨーロッパ旅行をする。 日本に立ち寄り、資料収集のため東京神学校の寮に滞在する。この時、友人の鮮于輝の紹介で岩波書店の安江良介に出会う。京都なども旅行する。 『アジア宗教と福音の論理』（新教出版社）を刊行する。 徳成女子高等学校の校長に就任する。 徳成女子高等学校の校長を辞職する。 渡日の決心を固め、旅券の発給を受ける。 日本滞在のビザを受ける。その後、韓国内で「一〇月維新」が始まる。 徳成女子大学を休職する。新教出版の森岡巖と隅谷三喜男の尽力により、東京大学大学院政治学課程に留学することになる。 岩波書店の安江良介に再会する。	七二・七・四南北共同声明
七二・ 一〇五二	四六	「一九七三年韓国キリスト著宣言」を起草し始める。 「一九七三年韓国キリスト著宣言」を発表する。直後、韓国国内でキリスト教者の反政府運動が高まる。 東大の石田雄先生の下で日本政治思想を学ぶ。 立教大学非常勤講師として、「東アジアの文化と思想」の講義を行う。（一九八四、三まで） 講義のテキストとして、以前から関心を持っていた韓国史・韓国キリスト教について『韓国文化史』を執筆する。 当時の東京女子大の学長原島鮮と、小川圭治の尽力で、世界教会協議会の財政的援助により、東京女子大学の客員教授として、哲学とキリスト教を担当する。（一九八六、三まで） 『韓国現代史と教会史』（新教出版社）を刊行する。 海外在住の韓国人、無名の韓国知識人に発表の場を作るため、自ら主幹となり雑誌「歴史批判」を発刊する。 以後、資金集め、人材集めとネットワーク拡大のため、毎年渡米する。 『韓国文化史』（高麗書林）を刊行する。	七三 金大中拉致事件
七三・ 五二	五〇		
七四・ 四	五〇		
七五・ 五	五一		
七九・ 四	五五		

年月日	年齢	経歴	韓国情勢
一一・一二	五七	国際キリスト教大学の非常勤講師として、「朝鮮史」を担当する。(一九八六六まで)	七九 朴正熙大統領暗殺
八一・一	五八	この頃 教科書問題に関心をもち始める。	八〇 光州事件
八二・四	五八	東京女子大学比較文化研究所の客員教授になる。(一九八六まで)	
八四・五	六〇	東京女子大で知り合った小川晴久の紹介により、東京大学教養学部兼任講師として「朝鮮近代思想」を担当する。(一九八五・六まで)	
八五・一〇	六一	『現代史を生きる教会』(新教出版社)を刊行する。	八三 ラングーン事件
八六・四	六二	東京女子大学比較文化研究所のハーバード・イェンチンプロジェクトとして、小川圭治と共に、『日韓キリスト教関係史資料』(新教出版社)を刊行する。	八五 南北離散家族が初めて再会
八七・八	六三	『破局の時代に生きる信仰』(新教出版社)を刊行する。	
八八・四	六四	東京女子大学短期大学部の教授として、哲学と現代思想を担当する。	
八八・四	六四	東京女子大学現代文化学部の設置に伴う教員組織審査において適格と認められる。猿谷要(アメリカ) 森本哲郎(日本) 大林太良(日本) 伊藤虎丸(中国)とともに、新学部設置に当たり、特に地域文化学科のアジアコースを担当する。	
八九・一	六五	(アジア近代化論、朝鮮近代史、国際関係論Ⅱ、朝鮮文化研究、演習、朝鮮語中級、基礎演習担当教授として)	八八 ソウルオリンピック
八九・一	六五	東京女子大学現代文化学部の教授として、韓国を中心としたアジアの歴史・思想等を講義する。	
九〇	六六	この頃、精力的に講演を行う。	
九〇	六六	『チョゴリと鎧』(太郎次郎社)を刊行する。	
九〇	六六	『現代に生きる思想』(新教出版社)を刊行する。	
九〇	六六	日本農村伝道神学校で「キリスト教倫理」などを教える。(一九九二年まで)	
九〇	六六	東京女子大学比較文化研究所にて、大隅和雄・伊藤虎丸らと共に、三年計画で「日本・中国・韓国の歴史教科書に関する比較文化的研究」に取り組む。	九〇 盧泰愚大統領来日
九〇	六六	恵泉女学院大学で「朝鮮史」を教える。	韓ソ国交樹立
九〇	六六	『勝利と敗北の逆説』(新教出版社)を刊行する。	南北朝鮮首相会談

年月日	年齢	経歴	韓国情勢
九一・七	六七	東京高裁にて、家永三郎による教科書裁判の第三次訴訟控訴審で「韓国からみた教科書検定の問題点」について証言する。	九一 国連に南北同時加盟
九二・六	六八	韓国のクリスチャン・アカデミーによる大統領選挙を前にした韓国の政局に関するシンポジウムに参加するため、二〇年ぶりに一時帰国する。	九二 朝鮮半島非核化宣言合意 韓中国交樹立
九三・二八	六九	『韓国から見た日本』（新教出版社）を刊行する。	九三 金泳三大統領就任
四・二一		東京女子大学現代文化学部を退職する。	
九四・三八六	七〇	韓国に帰国する。 韓国のKBSの取材旅行のため、京都、東京、金沢、山形、大阪を旅行する。 KBSで放映される。	
		翰林大学校翰林科学院教授兼、日本学研究所所長に就任する。	
		ソウル新聞のコラムなどで、評論活動を再開する。	
		高麗大学校国際大学院で「日本の社会と文化」の講義を担当する。	
一〇・一一八		『人間的遺産とは何か』（岩波書店）を刊行する。	九四 金日成死亡
		古稀を迎える。	